



5月中旬頃、大園庭の畑になすびやピーマンなどの夏野菜をみんなで植えました。こ



どもたちは、大園庭に行くとき野菜の水やりを喜んでやってくれて、野菜が大きく育っていく様子を不思議そうに見ていました。

楽しんでしていたクッキングは、畑で採れた夏野菜を使ってピザを作りました。そんなに食べられるのかな？と思うほどピーマンをたくさん

生地にのせる子、苦手な野菜を少ししかのせない子、ウインナーいっぱいの子、いろんなピザができました。「先生、ピーマンいっぱい食べれたよ！」やったね、畑にありがとう。「また、クッキングしたい！」そうだね、今度は何をしようかな、楽しみだね。

【2歳児担当 佐原未佳】



「ピーマンいっぱい！」

ヨルダン館から ウィリアムス館への引越し

【児童養護施設博愛社】

夏休みも一週間を残すばかりの新学期が迫った8/20、ヨルダン館3フロアからこども部屋を個室化するなど改修工事を終えたウィリアムス館に、旧ヨルダンブロック3ホームのこどもたち約20名が引越しを行いました。慣れ親しんだホーム名は引き継ぎつつ、ウィリアムス館で元々生活していた、旧ナザレブロックの2ホームを合わせて5ホームが新たに住居を構えました。真っ白な壁にサラサラの木の床、少し広すぎるくらいのこども部屋は、これからそれぞれがポスターや人形、本など少しずつ好きなものを並べて居心地の良い空間へと変化させて行くことと思います。1978年に建てられて以降、45年間長らく暮らしたヨルダン館へは名残惜しさもありましたが、ウィリアムス館での新生活に心を弾ませつつ、晴れ渡る夏空の元、大汗を掻きながら荷物を運んだ引越しは、この夏の大きなイベントとなりました。

【主任 高橋明子】



引越し作業中の様子



築45年のヨルダン館

四季折々

サッカー観戦を通じて我が子に伝えたいこと

今年がJリーグ開幕して30周年の節目の年です。1993年開幕当時、よく父親に万博記念競技場へガンバ大阪の試合観戦に連れて行ってもらいました。当時のガンバ大阪はあまり勝利に恵まれず、僕は松並、辛島選手たちに憧れていましたが周りの友達からは「誰?」という反応でそこまで人気が無かった記憶があります。それから30年の月日が経った今、試合当日スタジアム周辺全体が青黒に染まり、サッカー専用の新スタジアムのゴール裏にはチャントが響き、胸には9つのタイトルの星がつくビッグクラブになりました。地域に根付いたスポーツはサッカーが先がけのように思います。各クラブの殆どは子どもたちの下部組織からトップチームまであります。チーム名にスポンサー企業名を入れる事は排除



「エスコートキッズで宇佐美選手と手を繋いだ思い出」

されおり、愛称名+地域名が必ず入っている事もJリーグの地域への思いの強さを感じます。今では息子を連れて観戦するようになりました。声をかけてくれる方も増えてきました。サッカー観戦を通じて我が子にテレビ中継では味わえないスタジアムの雰囲気や観戦マナー、地域、人と人が繋がっていく全ての様を感じてもらえたらこの上ない教育だと思っています。

【博愛の園 相談員
副主任 坂本康一郎】

「パパ広場」開催

【児童家庭支援センター】

毎週月曜日開催の赤ちゃん広場は祝祭日も実施しているのですが、平日にはなかなか来られないパパや幼稚園に行っている上のお子さんも久しぶりに参加してくれています。最近では子育て講座でもパパの参加が増えているため、今年度から年間5日ある祝

祭日の月曜日を「パパ広場」として、積極的にパパの参加を呼びかけることにしました。初回の7月の海の日には、予想を大きく上回る30人を超える親子の参加がありました。今後の企画としては、パパならではの関わり方や悩みなどを学べる場として「パパ講座」の実施を検討しています。託児付きの講座にすることで、ママの一人の時間も確保できると、ママたちは今からとても楽しみにされています。



「パパも一緒に!!」

【太田久美子】

はくあい介護サポートセンターとこども園の合同七夕祭

【デイサービスはくあい】

コロナ禍の影響により中断を余儀なくされていたことも園とサポートセンターとの交流イベントが6月26日に開催されました。可愛い子どもたちと優しいお年寄りの「七夕祭」です。

デイサービス生活者は利用者もこども園に招待され、園児たちと一緒に笹飾りを行い歌や手遊びなどを楽しみました。デイサービスはくあいは園児たちがデイサービスへ来て、利用者と一緒に願い事を書いた短冊の飾りつけをしました。こどもたちが歌や踊りなど元気いっぱい披露してくれた姿を見て、利用者の皆さんが笑顔で合いの手を入れたり優しい声で園児たちと話したりと大変喜ばれていました。

コロナ禍で人と人との繋がりが難しくなった今、普段関わる事が少ないこどもたちとお年寄りが同じ場所で同じ時間を過ごすことで、たくさん笑顔がこぼれていました。

【多島洋介】



「願い事が叶いますように!」

- ▽個人 1口 3千円
- ▽法人 1口 1万円
- ▽期間 4月～翌年3月
- ▽郵便振替口座番号 092074676
- ▽口座名義 社会福祉法人 博愛社

コロナ禍前までは、毎週木曜日、博愛の園1階の地域交流センターにユニットの枠を超えて集い、約1時間、ラジオ体操、口腔体操含め身体を



集団リハビリ再開しました
【博愛の園】

動かししたり、歌ったり、歩行練習を行ったりと、集団リハビリを行っていました。残念ながらこの3年間は集うことができず、ユニット内での活動に限定されていましたが、ようやく、この5月から再開することができました。「楽しく、にぎやかに、集って、身体を動かす」を目標に行っ

ていきます。まだ、カラーセラピーや紙芝居、図書ボランティアや喫茶など再会できていないプログラムもありますが、少しずつ再開でき、以前の様な賑やかな集いが戻ってくるように思います。
【機能訓練指導員 長谷川勝彦】



「3年ぶりに開催された集団リハビリ」



皆様のお越しをお待ちしております

開催しました。そうめんを食べ「もう1回戦！2回戦！」とうまくお箸が使えない方も一緒に楽しめるように職員がサポートします。日常生活のお手伝いをするため一緒に過ごす時間が多くなります。時間が長い分、気持ちを汲み取ることもできる思いやりや、

季節を感じる流しそうめん

【清心館】

清心館では七夕の日に3ユニット合同で流しそうめんを開催しました。認知症の症状で季節がわからない方もいます。ですが少しでも季節の移り変わりを感じて頂けるような行事を作りたいと思



「入念にリハーサルする職員たち」

【副主任 松村唯】

個性を受け入れることができる優しさを持った職員が清心館にはたくさんいます。そんな職員とお年寄り一人ひとりの日々の生活をたくさん思い出として残していきたいと思っています。「次のイベントは何かな」「次も絶対に参加したい！」と生きがいに感じられるイベントを作りたいと思っています。



「みんなでかんぱい！」



「みんなで花火、楽しかったね！」

【保育教諭 大西由香里】

楽しみました。大人にとってのもこどもにとっても素敵な夏の思い出となりました。

コロナが明けてようやく行く動規制が緩和されたこの夏、3月にこども園から巣立っていったこどもたちが一年生になり元気な姿を見せに来てくれました。友達や先生との再



会を喜び合いながら、グリーンホールでジュースを片手に乾杯しました。一人ずつ小学校で頑張っていることを発表する場では「おんがく！」「テスト！」「しゅくだい！」など立派にこたえ、一段と成長が感じられました。園庭遊びでは大好きだったドッジボールやビオトープの観察をしてこども園で過ごした日々を懐かしんだ後、みんなで花火を

博愛社フェスティバル開催のお知らせ

コロナ感染症軽減から4年越しに本格的に10月15日(日)博愛社フェスティバルを開催することになりました。初めてホームごとに店舗を設け、焼きそば・フランクフルト・綿菓子・

シューアイス、様々な模擬店とスーパースポーツ・宝釣り・射的・クイズのゲーム店舗バザー店舗を用意して皆様のお越しをお待ちしております。
また、引き続きバザー用品の寄贈もお待ちしております。
【フェスティバル委員会 原田あかね】



8月の初旬、ホームキャンピングで滋賀県へ行きました。初日は琵琶湖で水上アスレチックをし、バンガローではBQを行い、夜は職員、こどもで1日を振り返りながら就寝し、1日を終えました。2日目はルアー釣りや魚のつかみ取りをし、魚を職員が捌く姿を怖がりながらも皆興味津々に見ていました。京都市動物園では動物に触れ合い、2歳児も動物の迫力に怖がりつつ、時には笑顔で楽しんでいました。旅の締めは

銭湯で2日間の疲れを癒しました。2歳児から高校3年生と幅広い年齢の児童がいるホームでしたが、協力して楽しむ事ができ、「楽しかった!」と声を揃える様な、とても思い出に残る1泊2日のキャンプとなりました。
【紅葉ホームリーダー】
田村隆一郎



「波が高かったけど水上アスレチックを攻略できたぞ〜!」

【お詫びと訂正】
※81号の8頁の博愛社の歴史探求の中で上段の16行目フランガン神父の没年が「1950年」となっておりましたが、正しくは「1948年」の誤りでした。関係者の皆様にご迷惑をお掛けしましたことを心よりお詫び申し上げます。

博愛社には創設時から様々な人たちが訪問している。今回、ユニークなジャーナリスト・松崎天民（一八七八―一九三四）の博愛社訪問記事を見てみよう。彼は大阪新報社の記者として『小天地』二巻九号（一九〇二年六月十日）に松崎市郎という実名で「大阪博愛社を訪ふ」というルポを執筆している。彼には「木賃宿」等の底辺労働者への探訪記事もあり、彼の文章には暖かい人間愛に包まれた眼差しが底流としてある。

さてこのルポは博愛社が現在の地に移って三年後の訪問で、比較的早い時期の博愛社の状況が描かれている。松崎はその冒頭で以下のように表

博愛社の歴史探検 [40]
松崎天民の「大阪博愛社を訪ふ」を読む

現している。慈悲深い両親を亡くした、天涯依頼るに家なき孤児や、父もあり母もあるが、赤貧のため養育する事が出来ぬ貧児などを、直接若くは間接に救助収容して、これを育て業を授け、学を修めさした後、独立して世間に立つて生活せる様、人類相愛の大義に因つて、同情の手を加へて居るのは、中津川の畦、十三堤の北、梅田停車場を去る二十丁、大阪府西成郡神津村、大字三津屋にある博愛社である。また創設者小橋勝之助の遺言である博愛社の有名な「七つの事業」構想にふれながら、訪れた博愛社の当時の模様につき、彼自身の眼をとおして率直な博愛社の状況を詳論する。具体的に松崎は実之助、林歌子、阿波松之助ら多数の協力の下で、この広大な土地で、児童たちが年齢に応じて、家庭教育、実業教育、普通教育等を受け、独立精神を養い、

社会へ送り出されている。そして児童たちの早朝から就寝までの日常生活、そして彼等がここを出て、どのような職についているかを詳しく報じている。そして彼等が人として十分な生活が成就されるよう、人々に「同情」が与えられんことを期待する。「自分分は思ふ、人に同情し得る人は、人の中にあつても、実に多幸多福の人であると。然うだ、人類が人類を相愛するのは、臆て人類の価値を高くする所因であらう。」と記す。さらに松崎はここで生活す